



石田尚志《絵馬・絵巻》プロジェクション風景、日本銀行名古屋支店 南東角外壁、名古屋

# あいちトリエンナーレ2016 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2016 DIGEST



2019年へと、創造の旅は続く……



虹の  
キャラヴァンサライ  
あいち  
トリエンナーレ  
2016



ジョアン・モデ《ネットプロジェクト》、六供会場、岡崎 2003- photo: 三浦知也

# アートが未来を拓く

2016年8月～10月にかけての74日間、「あいちトリエンナーレ2016」が開催された。「あいちトリエンナーレ」は、3年に1度、愛知県で開催される国内最大級の国際的な現代アートの祭典である。3回目の開催となる今回は、「創造しながら旅(キャラヴァン)を続ける人間」をテーマとした。生きている土地との長い関係を通じて生まれ育まれてきた芸能と芸術、そして技術の伝統があり、そのイノベーションを続けてきた愛知は、世界に向けて「先端的」であることを創造・発信する。

**参加アーティスト数** — 119組  
**総来場者数** — 601,635人  
**経済波及効果** — 約63億円

## あいちトリエンナーレ2016

テーマ:虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅

2016年8月11日(木・祝)～10月23日(日) [74日間]

会場:愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、  
名古屋・豊橋・岡崎市内のまちなか

○名古屋

○岡崎

○豊橋

### [現代美術]

国際展では、美術館はもちろん、まちなかの建物の中や屋外にも作品が展示された。また、映画祭並の本数が揃う映像プログラムでは、多彩な作品で観客を楽しませた。

### [舞台美術]

オペラ、ダンス、音楽など、数ある国際芸術祭のなかでも舞台芸術の豊富さは「あいちトリエンナーレ」の特徴である。プロデュースオペラを始め、ジャンルを越えた最先端の舞台芸術が観客を魅了した。

### [普及・教育]

文化芸術を日常生活へ浸透させるための普及・教育プログラムも大きな柱として展開。実際に触ってアートを体感できる創作プログラム、幅広い層に向けた鑑賞プログラムや学校等団体向けのプログラムなども行った。

# あいちトリエンナーレ2016 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2016 DIGEST

## Contents

- 06 創造の旅、想像の旅  
アートが誘うところ——
- 08 キャラヴァンサライは  
豊橋・岡崎にも!
- 10 作品の出展は地球規模に  
世界を旅する芸術祭
- 12 あいちの“ものづくり”精神が  
人類の創造欲とシンクロする
- 14 アートでコミュニケーション  
愛知の魅力を再発見
- 16 あらゆるボーダーを越えた  
最先端の舞台芸術
- 18 学びを求める真剣な眼差しに  
アートと愛知の未来を想う
- 20 あいちトリエンナーレ拡大中!
- 21 メディアが追いかけたトリエンナーレ
- 22 主要データ一覧



大巻伸嗣《Echoes Infinity—永遠と一瞬》作品内立ち入り解禁後の風景、愛知芸術文化センター 2016 photo:河上良



大巻伸嗣《Echoes Infinity—永遠と一瞬》、愛知芸術文化センター 2016 photo:怡土鉄夫



「あいちトリエンナーレ2016」オープニングレセプションの様子、名古屋東急ホテル、名古屋

## あいちトリエンナーレ2016

テーマ:虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅  
Homo Faber: A Rainbow Caravan  
会期:2016年8月11日(木・祝)~10月23日(日) [74日間]  
会場:愛知芸術文化センター/名古屋市美術館  
名古屋市内のまちなか  
(長者町会場、栄会場、名古屋駅会場)  
豊橋市内のまちなか  
(PLAT会場、水上ビル会場、豊橋駅前大通会場)  
岡崎市内のまちなか  
(東岡崎駅会場、康生会場、六供会場)  
芸術監督:港 千尋 (多摩美術大学美術学部情報デザイン学科教授<映像人類学>)  
主催:あいちトリエンナーレ実行委員会



## 創造の旅、想像の旅 アートが誘うところ——

あいちトリエンナーレ2016では、「虹のキャラバンサライ 創造する人間の旅」をテーマに掲げたおと「旅」を思わせる作品が数多く並び、時に観る者の心を躍らせ、時に癒した。それは愛知に居ながらの“想像の旅”であり、アーティストたちがたどってきた“創造の旅”。鑑賞者は旅情を分かち合いながら、人それぞれの解釈が終着点であっていいと優しく示唆されたのではないだろうか。

米ミシガン州から初来日したジェリー・グレッツィンガーは70歳を超えたベテラン

ながら、当芸術祭で日本で初めて紹介することになったアーティストだ。1960年代から彼が描き始めた六つ切りサイズのパネル3,200枚以上からなる架空の都市の地図《ジェリーズマップ》は、彼のライフワークであり、スケールは圧倒的。アクリルやマーカー、色鉛筆、インク、コラージュなど様々な手法で描かれていて、色彩鮮やか。架空の都市の中に不思議なリアリティもある。そのうち約1,350枚が愛知県美術館10Fの入口に展示され、今回のテーマを象徴的に表す作品として人々の目を奪った。



ジェリー・グレッツィンガー《ジェリーズマップ》、愛知芸術文化センター 1963-2016



ジェリー・グレッツィンガーによる説明会の様子 photo: あい撮りカメラ部



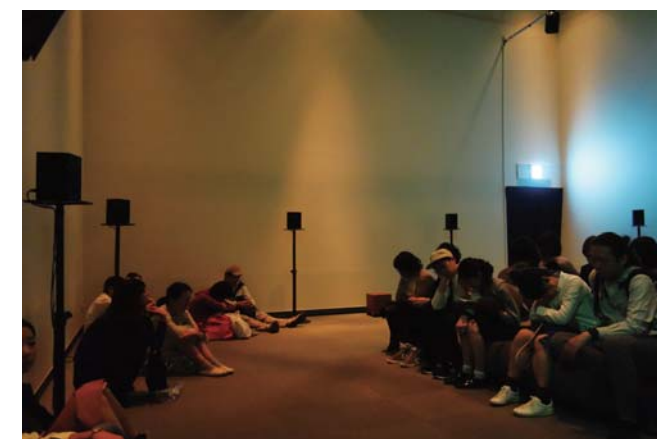
味岡伸太郎《峠へ》、愛知芸術文化センター 2016

味岡伸太郎のアーティストとしての契機は、豊橋の自宅を改築する際の東三河の色彩豊かな土との出会い。今回は、愛知県が接する4県との県境70カ所の断層部分から採取した土の色を展示し、愛知県が持つ豊かな土の世界を示した。



佐々木愛《はじまりの道》、豊橋駅前大通会場、豊橋 2016 photo: あい撮りカメラ部

英国発祥の砂糖細工技法“ロイヤルアイシング”による壁画が出現。佐々木愛は伊勢・鳥羽から伊良湖、さらに豊橋へと続くこの地域の古の交通、通称“塩の道”を題材に新作を発表した。英国の伝統が日本の現代美術に、塩の道が砂糖により表現される。その変化もまた創造の旅かもしれない。



クリス・ワトソン《グレートサークル》、愛知芸術文化センター 2016

photo: あい撮りカメラ部

クリス・ワトソンは世界各地で自然の中にある音を集め、場所の記憶や土地の歴史を聴覚から想像するインスタレーションに仕立てた。今回は故郷の英国シェフィールドから北極圏を経由して、愛知に到る道中11カ所で採取した生き物の音を聴かせ、音による世界への飛行を試みた。



グリナラ・カスマリエフ&ムラトベック・ジュマリエフ《ニュー・シルクロード-生存と希望のアルゴリズム》、豊橋駅前大通会場、豊橋 2006 photo: 植土鉄夫

キルギス共和国出身のアーティスト2人組が、かつて絹織物を運ぶために作られたシルクロードの現在に注目した。グローバル化の影響を受けて、産業廃棄物を載せた巨大トラックの行き交う様子とそこで生活する人々の姿を、5面スクリーン上に交錯するかたちで映し出した。

## キャラヴァンサライは豊橋・岡崎にも!

前回のあいちトリエンナーレ2013では岡崎、今回は新たに豊橋が主要会場に加わったことで、展示エリアが拡大。愛知県内を巡るアートの旅の雰囲気が高まった。テーマにある“キャラヴァンサライ”、いわば創造の旅の宿営地が、まちなかに出現。小さな路地の数々に旧市街の風情が漂う岡崎・六供会場、歴史薫る豊橋・水上

ビル会場などと現代アートとの共存は、街の魅力の再発見にもつながった。それらの中でも、岡崎公園多目的広場に期間限定で公開されたアーキテクト・オブ・エアの《ペンタルム・ルミナリウム》は、作品の中に入って鑑賞できることもあり、整理券配布窓口に長蛇の列ができるほど反響を呼んだ。また、穂の国とよはし芸術劇場PLATで展示した大巻伸嗣の《重力と恩寵》は、壺をかたどった高さ7メートルもの作品で、動植物等の線描が表面を覆った。壺の中を天井から吊られた強い照明が昇降することで、ロビーから外に向けてその影を投げかけた。作品の傍らには、いつもの日常を過ごす人々の姿があり、まちなか展開ならではの様子がうかがえた。



アーキテクト・オブ・エア《ペンタルム・ルミナリウム》、康生会場、岡崎 2013 photo: 菊山義浩



アーキテクト・オブ・エア《ペンタルム・ルミナリウム》、康生会場、岡崎 2013 photo: あい撮りカメラ部

大巻伸嗣《重力と恩寵》、PLAT会場、豊橋 2016 photo: 怡土鉄夫



会場のひとつとなった豊橋の水上ビル photo: あい撮りカメラ部

ブラジルやキューバ、リトアニアなど国際色豊かな作品巡りで楽しむことができた、通称「水上ビル」。豊橋駅からすぐの農業用水路上に建てられた約800メートルの珍しい構造のビルである。展示空間の建物自体が何かを物語っているようで、初めて訪れた人々を驚かせた。



石田尚志《絵馬・絵巻》プロジェクション風景、豊橋市公会堂、豊橋 photo: あい撮りカメラ部

国登録有形文化財である豊橋市公会堂は、ヨーロッパ風の円形ドームが目を引き、建物そのものに鑑賞する価値あり。石田尚志の建物の正面に投影されたプロジェクションによる映像作品が音楽の生演奏とともに会場を彩り、空間の再検証につながった。



会場のひとつとなった石原邸 photo: あい撮りカメラ部

岡崎・六供会場にある通称「石原邸」は江戸時代後期築の商家。この歴史的空間を現代美術の展示会場とした。愛知県出身の柴田真理子による無国籍風の陶芸や佐藤翠が鏡に描いた絵画、日用品の色や光に愛しさが宿る田島秀彦のインスタレーションなどが印象的であった。



会期中に期間限定で就航した和船。岡崎アート広報大臣のオカザえもん

岡崎・乙川で親しまれてきた「和船」が会期中に就航。東岡崎駅北側から潜水橋付近までを結んだ。市の名物キャラクター・オカザえもんもPRした。川から街を見上げる新鮮な風景が好評。オカザえもんは岡崎のアート広報大臣として、多彩な場面で岡崎や現代アートの魅力を伝えた。

## 作品の出展は地球規模に 世界を旅する芸術祭

あいちトリエンナーレ2016ではブラジル出身のダニエラ・カストロ、トルコ出身のゼイネップ・オズをキュレーターに迎え、中南米、中近東をはじめとした幅広いエリアのアーティストを紹介した。

フィリピン出身のカワヤン・デ・ギアはヨハネ黙示録にインスピレーションを受け、本国でかつて大量に生産された映画フィルムを素材に等身大の馬の彫刻を制作。消費されるもののイメージや、それに左右される大衆の声を黙示録として伝えるかのようにであった。モンゴル出身のノミン・

ボルドも消費社会を作品に投影。長い伝統を持つ仏教美術の画法をベースとし、グローバル化する世界の風景を女性の視点から描いた。パプアニューギニアからはタロイ・ハヴィニが参加。メラネシアで伝統的に使われてきた貝の貨幣をモチーフに、陶で作られた小さなディスクの連なるインスタレーションを発表した。ここにも貨幣の意味や価値を問い直す視線がある。現代アートからは、世界中の人々の今を生きる実感が伝わってくる。それはニュースなどだけではわかり得ないものなのだ。



カワヤン・デ・ギア《24コマ：4幕のパラダイム》、愛知芸術文化センター 2016



ノミン・ボルド《火》《水》、名古屋市美術館 2016 photo: あいづりカメラ部



タロイ・ハヴィニ《ペロアナ(貝殻の貨幣)》、愛知芸術文化センター 2015/2016 photo: 怡土鉄夫



アリ・シェリ《断片》、愛知芸術文化センター 2016 photo: 菊山義浩

中東レバノン出身のアリ・シェリは、発掘現場やオークション会場などで集めた“もの”で構成される作品《断片》と、それらに与えられた意味を語る映像インスタレーション《石化》を展示。歴史や文化の中で物に紐づけられる価値や解釈の在り様に一石を投じた。



マリアナ・カステリーヨ・デバル作品展示風景、名古屋市美術館 photo: 怡土鉄夫

ベルリンに拠点をおいても、メキシコ人としての自らの出自を意識するマリアナ・カステリーヨ・デバル。今回はアツオンパで制作された陶器の柱とアステカ時代の絵文書を題材にしたアニメーションを出品。スペインに征服される以前・以後の母国を冷静に示した。



シュレヤス・カルレ《最初の複製品—皿が先か、皿が先か》、康生会場、岡崎 2016 photo: 怡土鉄夫

公共空間における芸術的実践に強い関心を持つインド出身のシュレヤス・カルレ。今回はオフィスと住居が一体になったモダニズム建築の岡崎表屋を舞台に、既存の環境と作品との境界が曖昧な空間を構築し、「日本のなるもの」と日本の近代化について考察した。



アニエス・ヴァルダ『キューバのみなさん、こんにちは』愛知芸術文化センター／豊橋市公会堂、豊橋 1963 photo: Agnès Varda

第二次世界大戦を逃れ、ベルギーからフランスへ移住したアニエス・ヴァルダ。出品された『キューバのみなさん、こんにちは』は、革命直後の若き社会主義国を撮影した写真1,800枚で構成される歴史的記録だ。同作は当芸術祭に時間的な広がりを与えた。



LOCUS FABER ツクロッカ《歩く山車》、長者町会場、名古屋 photo : 河上良

## あいちの“ものづくり”精神が 人類の創造欲とシンクロする

芸術作品は“創造”という観点において“ものづくり”と共有できるところが大きい。日本の成長をいつの時代もリードしてきた“ものづくり”の地・愛知にとって、国際芸術祭の意義は計り知れないものとなっている。

あいちトリエンナーレ2016では先端的ものづくりプロジェクト「LOCUS FABER ツクロッカ」が大きな役割を果たした。開幕に先駆けて2015年8月から動き出した本プロジェクトは、一般の参加者とアイデアや技術を共有しながら、ものづくりの可能性を広げるワークショップを開催。同時に現代アートの作品制作においても、変化をもたらした。2016年4月からは本プロジ

ェクトを牽引してきたメディアアーティストの河村陽介が本格的にプロジェクトリーダーとなり、国内外のアーティストをゲスト講師に迎えワークショップはますます活発化。参加した市民は『動き』『光』『音』をキーワードに制作を行い、会期中はそれをバージョンアップした作品が愛知芸術文化センター地下2FのアートスペースXに展示された。2015年、2016年に長者町あびす祭りの会場で行ったワークショップでは、いくつものパーツを組み合わせた、独特な「テオヤンセン機構」により《歩く山車》を制作。長者町あびす祭最終日には長者町山車や白川昌生の《シャチホコの山車》とともに引き回された。



オープニングレセプションの様子、名古屋東急ホテル、名古屋 photo : 佐土鉄夫

登壇者が着用している光るスーツ、法被は「LOCUS FABER ツクロッカ」がプロデュースした。



マーク・マンダース《サイレント・スタジオ》、愛知芸術文化センター 2016 photo : あい耀りカメラ部

オランダ出身のマーク・マンダースは、人や動物などのモチーフで緩やかな空間を作り出した。生と死、動と静、生物と彫刻といった対象的な関係が作品により示され、制作者、つまりは創造者のアトリエに迷いこんでしまったような感覚が作り出され、鑑賞者を困惑させながら魅了した。



ヴァルサン・クールマ・コッレリ《パープ・オブ・ジ・アース》、愛知芸術文化センター 2016 photo : 菊山義浩

インド出身の彫刻家ヴァルサン・クールマ・コッレリは、アシスタントである息子に伴って瀬戸と名古屋で滞在し制作。焼き物の古い伝統に刺激を受けながら制作した陶器を、豊田で採れた竹や美濃の土によるピラミッド形の一種のシェルターとともに展示し、新作として発表した。



菅野 創十やんツー《形骸化する言語》、愛知芸術文化センター 2016

デジタルメディアやテクノロジーの分野で既存概念にとらわれず共同制作するアーティスト2人組が、手書き文字を機械学習させるシリーズの新作を発表。異なる言語圏のアーティストが集まる国際芸術祭を意識し、さまざまなテキストを覚えさせた機械が書く文字に注目が集まった。



高橋士郎《レーモン・ルーセルの実験室》、愛知芸術文化センター 2013-2016 photo : 菊山義浩

高橋士郎は小説家レイモン・ルーセルの代表作『ロクス・ソルス』を読み解き、大型インスタレーションを発表。テクノロジーアートやメディアアートのアイデアを生かしつつ、一方で日用品や再生素材も活用。“ファブラボ”的な思想が、芸術家と市民の垣根を取り払った。



西尾美也+403architecture [dajiba]《パヴロフ》、愛知芸術文化センター 2016 photo: 菊山義浩

## アートでコミュニケーション 愛知の魅力を再発見

あいちトリエンナーレ2016では、多数の「愛知ならではの作品」を展示した。

西尾美也+403architecture [dajiba] による《パヴロフ》では、愛知県を中心に人々の記憶が詰まった衣服を多数貰い受け、それらを展示するのみならず、服の図書館のような、トリエンナーレ来場者の誰もが利用できる共有のワードローブへと展開した。奈良県を拠点に世界中で衣服を用いた表現活動を行う西尾と、静岡県浜松市を拠点にショップや住居などで独自のリノベーションを手掛けてきた

[dajiba]。方法は違えど、両者は創造とコミュニケーションの関係性を探求している。

また、舞台芸術ではダンスカンパニーのCo.山田うんが、愛知県奥三河地方に伝わる芸能神事「花祭」へのオマージュとして新作『いきのね』を発表。創作前に何度も祭をリサーチし、地元関係者とも交流することで、親密さを持って取り組んだ。その結果、「花祭」の要素を装表的に取り入れるのではなく、根底にある土着のエネルギーをしっかり汲み取って、現代の舞へと昇華させた。



Co.山田うん『いきのね』、名古屋芸術創造センター photo: 羽鳥直志



ディアンドデパートメントプロジェクト《d MARK AICHI 展 ～愛知県の観光をデザインする視点でみる～》、長者町会場、名古屋 2016 photo: 怡土鉄夫

日本各地のデザインを探索し、各都道府県1冊ずつの観光ガイドを制作している「ディアンドデパートメントプロジェクト」が、19号目の「愛知号」を刊行。編集部は2ヵ月間かけて現地で情報収集し、土地に馴染みのない編集スタッフで新鮮な視点で発掘し、その成果を作品として展示した。



関口涼子 with フェリペ・リボン  
《キャラヴァンサライ・メニュー》  
味見会の様子、アイリス愛知、名古屋

翻訳のみならず複数のジャンルにまたがる著作活動を行う関口涼子。岡崎・六供会場の石原邸では、ガラス瓶に入った香辛料を色美しく展示する一方、愛知県ゆかりの食材「八丁味噌」を使ったオリジナルレンピを創作。国境を越えてあらゆる料理に溶け込む味噌を通じ、味覚の翻訳というテーマを探った。



ルアンルパ《ルル学校》のワークショップ風景、長者町会場、名古屋 2016 photo: 怡土鉄夫

アーティストたちを中心に設立したインドネシアの非営利団体ルアンルパは、アートの創造性を駆使して都市や文化的課題に向き合う。近年はコミュニティ形成、人材育成に力を注いでいることから、長者町会場で《ルル学校》という私設学校を運営。公募で集まったメンバーと実践的な時間を共有した。



山田 亘《大愛知なるへそ新聞社》、栄会場/長者町会場、名古屋 2016

愛知県出身の山田亘は多彩なメディアによる表現の可能性を探ってきた。今回はベルリンや大阪で展開した《なるへそ新聞》の最新版《大愛知なるへそ新聞》を発行。名古屋・栄会場の中央広小路ビル内に立ち上げた編集部などで、一般の参加者とともに取材や編集などの紙面制作に取り組んだ。常連の参加者も現れ、地元密着度が深まった。

## あらゆるボーダーを越えた 最先端の舞台芸術

従来のアートの枠組を越境するあいちトリエンナーレ2016のプログラムの中でも、舞台芸術は今やジャンル分けが無意味なほど、横断的な作品が創作されている。

あいちトリエンナーレ最大規模の作品であり、毎回最も異彩を放つプロデュースオペラ。今回は日本のコンテンポラリーダンス黎明期から活躍し、演出や美術、照明、衣裳でも才能を発揮する勅使川原三郎がオペラの演出を手がけた。勅使川原版『魔

笛』は、歌と歌の間の語りの部分を佐東利穂子によるナレーションと、佐東と東京バレエ団の16人のダンサーによる身体表現に置き換え。世界で活躍する妻屋秀和や森谷真理をはじめとするソリストの歌唱と新鋭ガエタノ・デスピノーサの指揮で奏でられた音楽を際立たせ、より豊かに物語を伝えた。

『魔笛』と同じ愛知県芸術劇場大ホールで上演されたのが、フィリップ・ドックフ

レ率いるダンスカンパニーDCAによる『CONTACT』。オリジナルの歌やライブ演奏、芝居に加えて、映像トリックを巧みに使ったイリュージョンやアクロバティックな宙吊りなどのスペクタクル要素満載で、観客を大いに楽しませた。パフォーミングアーツには総勢10組のアーティストが参加。10月6日から会期終了までの期間を「レインボーウィークス」と称し、作品を集中的に上演した。



あいちトリエンナーレ2016プロデュースオペラ『魔笛』、愛知県芸術劇場大ホール photo:小熊栄



カンパニーDCA/フィリップ・ドックフレ『CONTACT』、愛知県芸術劇場大ホール photo:南部辰雄



青木涼子『秘密の闇(ねや)』、名古屋市青少年文化センター photo:南部辰雄

能と現代音楽の新たな試みを行う青木涼子が能オペラ『秘密の闇(ねや)』を世界初演。能『安達原(黒塚)』を下敷きに、ネクスト・マッシュルーム・プロモーションが奏でる西洋楽器と日本の謡が融合。デザイナー・廣川玉枝の衣装や建築家・田根剛による舞台空間も斬新で、東西も時代も超越した。



アニマル・レリジョン『Chicken Legz』、豊橋公園、豊橋 photo:羽鳥直志

スペインの気鋭パフォーマンス集団アニマル・レリジョンは初来日。脚光を浴びるきっかけとなった音楽的・身体的作品『Chicken Legz』を豊橋公園で“あいちバージョン”として上演した。フォークリフトまで登場する迫力のパフォーマンスと隣接する吉田城のコントラストも抜群。



イスラエル・ガルバン『FLA.CO.MEN』、名古屋市芸術創造センター photo:羽鳥直志

フラメンコの新たな可能性を追求し「革命児」と称されるイスラエル・ガルバン。ガルバンがたったひとりで踊る代表作『SOLO』と、先鋭音楽家たちとのコラボレーションによる最新作『FLA.CO.MEN』を2会場で披露。伝統様式も踏まえつつフラメンコのイメージを一新し、賞賛を浴びた。



カンパニー・ディディエ・テロン『LA GRANDE PHRASE』、長者町会場、名古屋 photo:河上良

名古屋市内のまちなかでパフォーマンスを披露したのは、フランスからやってきたカンパニー・ディディエ・テロン。膨張したコスチュームを身にまとったダンサーたちが名古屋美術館サンクンガーデンと長者町の路上に出現。通りすがりの人も思わずカメラを向けるほど大きなインパクトを与えた。

## 学びを求める真剣な眼差しに アートと愛知の未来を想う

あいちトリエンナーレでは“エデュケーション＝普及・教育”にも初回から取り組んできたが、2016年は特に目に見えて成果を上げた。その拠点となったのは4つの活動空間だ。

愛知芸術文化センター12Fに設けられた「ダミコルーム」は、ニューヨーク近代美術館の初代教育部長ピクトル・ダミコに由来。彼が1942年に考案した装置「アートティーチング・トイ」が並ぶ部屋では、来場者が見たり触ったりすることでアートの基本要素である光や色、形を意識。作品を鑑賞する前の準備にもつながった。その隣の部屋「キャラヴァンファクトリー」でも、子どもから大人まで体験できる創作プログラムを実施して大盛り上がり！ また、名古屋市美術館や豊橋・岡崎地区でもエデュケーシ

ョンの拠点となった、ポルトガル語で“駅”を意味する「エスタシオン」。特に愛知芸術文化センター10Fでは作品鑑賞のヒントが詰まった「キャラヴァンバッグ」の貸し出しなどを行って鑑賞をサポートした。そして愛知芸術文化センター8F「ライブラリー／プラットフォーム」は、関連書籍の閲覧や休憩ができるほか、休日はレクチャープログラムの会場として、平日は児童・生徒の団体鑑賞の拠点として賑わった。

なお、これらの空間設計はアーティスト・ユニット「L PACK」が手がけた作品。芸術祭のために作られた特別な学びの場は、来場者の好奇心のスイッチを入れ、オープンな創作活動をうながした。あいちトリエンナーレの進化あるいは成熟は、私たちの文化、未来に直結していくはずだ。



「キャラヴァンファクトリー」での創作体験の様子



「ライブラリー／プラットフォーム」でのレクチャープログラムの様子



「ダミコルーム」でのアートティーチング・トイ体験の様子



ベビーカートツアーの様子

鑑賞プログラムは、一般向けの対話型ガイドを始め、小中学生向け、家族向けプログラムなどが盛りだくさん。高校生鑑賞プログラムではアートや世界について意見を共有するディスカッションも行われた。視覚や聴覚に障がいのある方向けの鑑賞会も開催。幅広い層を対象にプログラムを展開した。



二藤建人によるアーティストプログラムの様子

他ジャンルとアートをつなぐシンポジウムやフィールドワークなど多彩なレクチャープログラム。中には「ものづくりとアートの接点 トヨタのDNAとデザイン」といった演題も。二藤建人が一般参加者と行った「だれかの重さを考える」など、作家と一緒に活動できるアーティストプログラムも大反響。



アーティスト派遣事業 佐藤克久による特別授業の様子

愛知芸術文化センターと名古屋市美術館では、小学生から高校生までを対象に学校向け団体鑑賞プログラムを実施。ガイダンス付きのプログラムもあり、楽しく作品を観賞することができた。また、アーティスト派遣が行われた学校では、創作過程に触れる貴重な体験も実現。



「エスタシオン」でのキャラヴァンバッグ貸し出しの様子

# あいちトリエンナーレ拡大中!

## 県内を「旅」する展覧会 モバイル・トリエンナーレ

メイン会場の名古屋、豊橋、岡崎以外にも地域への文化芸術活動の浸透を図るため、旅する展覧会モバイル・トリエンナーレを展開。設楽町、大府市、一宮市、安城市の4カ所で、現代美術参加アーティストの作品を展示した。



大府市勤労文化会館での展示風景



一宮市博物館での展示風景 photo: あい撮りカメラ部

## MOBILE TRIENNALE



アートラボあいち長者町。壁画は、2013年の参加作家リゴ23による《Looking at 2013 from 1952 Nagoya》



アートラボあいち大津橋での「Sky Over III」の展示風景

## ART LAB AICHI

### 芸術大学連携 プロジェクトの拠点 アートラボあいち

地元芸術大学(愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学)と連携した展覧会「Sky Over III」を開催するとともに、あいちトリエンナーレの情報やこの地域のアート、まちに関する情報を発信した。



観客を案内するボランティア photo: あい撮りカメラ部

### 1,000人を超える ボランティアはじめ 支援者 多数

「あいちトリエンナーレ」の成功に欠かせないのが支援者の存在である。1,000人を超えるボランティアは、会場案内や作品ガイドなど多岐に渡り活躍した。また、ペロタクシーのスタッフは暑い中でも観客を乗せて走らせてくれた。そして忘れてならないのが、展示会場となる地域の人々。多くの方の協力によって、この芸術祭を運営することができた。



ペロタクシー photo: 河上良

## VOLUNTEER



会期終了後のボランティア表彰

# メディアが追いかけたトリエンナーレ

2016.7.30 読売新聞

2016.8.26 中日新聞

2016.8.11 毎日新聞

2016.9.1 毎日新聞

2016.9.14 中日新聞

2016.9.3 読売新聞

2016.10.5 朝日新聞

2016.10.24 中日新聞

2016.10.12 中日新聞

2016.10.17 朝日新聞

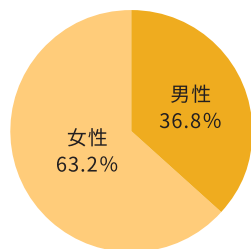
2016.8.4 中日新聞

2016.8.23 朝日新聞

## DATA

### 国際展への来場者の状況

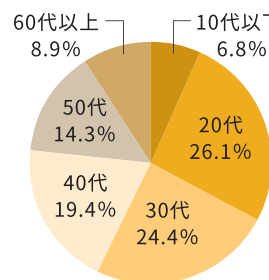
#### 来場者の男女比



#### 女性が63%

男女別では、女性が63.2%、男性が36.8%となっている。

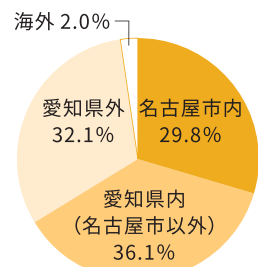
#### 年齢別来場者



#### 30代以下が57%

来場者の年齢別では、30代以下の若い世代が57.3%を占めている。

#### 地域別来場者



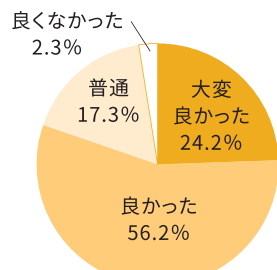
#### 来場者の34%は県外から

来場者の地域別割合は、県外32.1%、名古屋市内29.8%、名古屋市以外の県内36.1%。県外からは、ほぼ全都道府県からの来場があり、そのうち半数近くが、首都圏・京阪神からであった。



### 来場者アンケート結果

#### 全体の感想

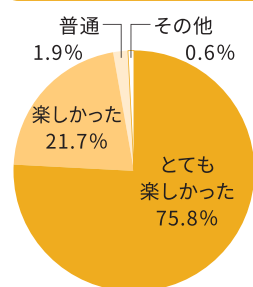


#### 良かった80%

来場者の80.4%が「大変良かった」または「良かった」と回答。

### 「ダミコルーム」「キャラヴァンファクトリー」アンケート結果

#### 今日は楽しかったか

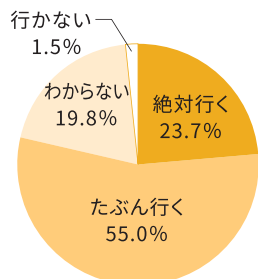


#### 楽しかった98%

子どもから大人までアートを体感できる「ダミコルーム」「キャラヴァンファクトリー」参加者の97.5%が「とても楽しかった」または「楽しかった」と回答。



#### 次回トリエンナーレに行きたいか



#### 行きたい79%

来場者の78.7%が次回のトリエンナーレにも「絶対行く」または「たぶん行く」と回答。

## 数字で見るあいちトリエンナーレ2016

### アーティスト数

# 119組

「虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」というテーマのもと、世界38の国と地域から119組のアーティストが参加。最先端の現代美術、ダンスやオペラなどの舞台芸術などを紹介した。

### 総来場者数

# 601,635人

8月11日から10月23日までの74日間で、60万人以上の方にお越しいただいた。

### 経済波及効果

# 約63億円

あいちトリエンナーレ2016の開催により、愛知県内では63億円の経済波及効果があったと考えられる。

### パブリシティ効果

# 33億円以上

メディアに取り上げられた件数は、新聞558件、テレビ92件、ラジオ45件、ウェブ等903件であった。これらのパブリシティ効果(広告換算費)は33億円以上と想定される。

### 来場者に占める中学生以下の割合

# 10.0%

国際展(創作プログラムを含む)の来場者のうち、中学生以下の来場者の割合は10.0%であった。

### 展示面積

# 21,644㎡

展示面積は通常の愛知県美術館企画展の展示スペースの10倍を超える21,644㎡を使用した。

### 1日の最多来場者数

# 27,352人

会期中で来場者が最も多かったのは、『虹のカーニバル』2日目を開催した9月25日(日)で、27,352人の来場があった。(1日当たりの平均来場者数は8,130人)

### ボランティア登録者数

# 1,144人

会場運営、ガイドツアーなどの業務に従事するボランティアに1,144人の登録があった。

### 「ダミコルーム」「キャラヴァンファクトリー」参加者数

# 43,613人

現代美術に触れ、アートを体感できる2つのプログラムには、43,613人の来場があった。

### トリエンナーレを鑑賞した学校数

# 90校

学校行事等としてトリエンナーレを鑑賞したのは90校であり、多くの児童・生徒が芸術に触れる機会となった。

### 企業・団体・個人の支援件数

# 257件

企業・団体・個人から「協賛」、「協力」、「会場提供」、「有償広告掲載」の支援をいただいた件数は、257件にのぼった。

### オフィシャルグッズ

# 55種類

あいち公式デザイングッズ、アーティストグッズ、地元名産品のパッケージをリデザインする「あいちの逸品 リ・デザイングッズ」21品目55種類を作成し、オフィシャルショップ等で販売した。

### 公式ウェブサイトへのアクセス数

# 596,761セッション

会期中には、127の国と地域から596,761セッションのアクセスがあった。  
※Google Analyticsによるセッション(訪問)数

### Twitterのフォロワー数

# 18,669人

公式アカウント「@Aichi\_Triennale」のツイートを漏らさずチェックしようと「フォロー」を行った人は、閉幕時で18,669人にのぼった。

### Facebookのファン数

# 13,896人

公式Facebook「AICHI TRIENNALE」のファン数(いいね!数)は、閉幕時で13,896人にのぼった。